



アメリカのヴァイオリンの大家、アイザック・スターンが死んだ。八十一歳。

スターンがアメリカの新しい星、ハイフェッツ二世といった触れこみで初めて日本に来たのは戦後まもなく五〇年代の初めだった。当時はまだ内幸町にあったNHKの第一スタジオでの披露会には一般の人より音楽の専門家や関係者の方が目立つたくらいだった。

評判は上々で「なるほどこれがハイフェッツをつぐアメリカの輝かしい星か」といった声が高かった。でも、井口基成ほか、このレッテルに首をかしげる人も無くはなく、まだ若かった私もその一人だった。

その後(一九五三年)、私はアメリカに行き、まるで違う環境の中で改めてスターンをきく機会をもったが、そうしてみると、ハイフェッツとの違いははつきりしていた。ハイフェッツはすばぬけた技巧の冴えの上に、磨きぬかれた「音」をもち、何をきいても「ハイフェッツだ」とわかる演奏をしたが、スターンはスマートさも冷たさもなく、強烈な官能美もなく、逆に無骨に近い人懐かしさで際立っていた。

音展望



吉田 秀和

スターンのこと

世界市民としてアメリカ体現 他者との連帯求め実践に努力

ニューヨークは地球上のあらゆる地域から各種各様の種族の出身で、多種多様な宗教的文化的背景や価値観をもった人々がわんさと流れ集まってきて形作られてきた土地である。それは無限の砂が吹きよせられた丘陵の様なものであり、その砂の一粒一粒がそれぞれの生を営む一方で、相寄って共同体を生み出し、ある普遍的なものの誕生をみてきたところである。

まないは別として、営々として築き上げつつある新しい世界的文明の結実への極めて恣意的な攻撃ということにはならないか？
しかしまた、同じ論理でもって、私はこの大痛撃に対して、極度の単純化された「純粹アメリカ像」を掲げて、カウボーイの単細胞的反応をふりまわすのも、破壊的結果を招きよせることにはなれない。それとも、こういう反応が生まれるのは医学にいう「身体内部から自然発生的に出てくる自己破壊的因子の働き」なのだろうか。

ある青年がブラームスを弾くと、スターンは「この曲はどんな性格？」ときいたが、青年にはその意味が通せず、ただ先へ先へとひくばかり。終わるまで辛抱したスターンにもう一度きかれると、青年はボソッと「暗い色かしら？」と呟いた。途端にスターンの顔色が晴れ上がり「その通り。でも君の演奏からはそれが聞こえなかったよ」というと、青年は再び楽器をとり上げた。すると前とは全く違う音楽が鳴り出した——本当のブラームスが……。

音楽家スターンを知るには彼のブラームスのソナタ全曲のCDをきくのが一番良い。これほどの音楽の不思議な暗さと明るさの交代にみちた奥行きを感ぜず演奏はめったにない。第一番ソナタの懐の深い憧れにみちた歌いぶり。第二番第一楽章でピアノが反復する二音の持続低音の上、イ、ハ、ホと分散和音を叩く(ピアノニシモ)で静かに滑るように上へ上へと昇りつめてゆく時に醸し出される恍惚感。第三番ソナタの成熟の極みから生まれた複雑と大胆との微妙な共存。

私は「これが明日のアメリカを代表する人なのかしら」と訝ったものだが、実をいうと、アメリカにはこの二人のほかになどいろいろな音楽家がいたのだ。
アメリカの音楽家とは何か？
ハイフェッツはリトアニアのザイルナに生まれ、ロシア最高の教師アウアーに師事した後、西欧に出て成功し、さらにアメリカに渡ってニューヨークのデビューでセンセーショナルな成功を納め、ち世界最高の名手に数え入れられた人だ。一方、スターンだって実はウクライナの生まれ。一九二〇年まだ揺籠に在中に両親に連れられ、サンフランシスコに移住し、その音楽教育を受けた上で

十六歳でデビュー、翌年にはニューヨークの初舞台での大成功を皮切りに急速に世界的キャリアを築き上げてきた人である。粘着力に富む彼の演奏ぶりにユダヤの家系の影響をみる人もあるけれど、そんなことをいったらハイフェッツだって同じはずだ。

こういう二人のところがアメリカ的なのか。
周知の通り、アメリカ、特にニ

とすれば、こういう共同体に対し外部から破滅的な打撃を加えるようなことは、全人類が好むと好まないは別として、営々として築き上げつつある新しい世界的文明の結実への極めて恣意的な攻撃ということにはならないか？
しかしまた、同じ論理でもって、私はこの大痛撃に対して、極度の単純化された「純粹アメリカ像」を掲げて、カウボーイの単細胞的反応をふりまわすのも、破壊的結果を招きよせることにはなれない。それとも、こういう反応が生まれるのは医学にいう「身体内部から自然発生的に出てくる自己破壊的因子の働き」なのだろうか。

スターンはアメリカ人としての世界市民、あるいは世界市民としてのアメリカの芸術家のタイプの体現でもあった。この人は非常に独特な音楽家であると同じくらい、自分の近くと遠くを問わず、他人との連帯を求め、強い責任感でその実践に努力した人だった。有名な話だけれど、彼はカーネギーホールが取り壊されるとき、即座に立ち上がってその保全のために働き、それに成功した。彼はパールマン、ズッカーマン、五嶋みどりその他の後輩の才能をいち早く認め、温かく迎え、強力に支援した。中国では文化大革命の十年で窒息状態に陥った音楽界に、状況が許されるようになると早速出かけていって老いたる音楽教師の救済、若い才能の発掘支援のために働いた。日本での講習会や音楽祭への参加も同じ志からだろう。
ナチを憎み、終生ドイツでの公演を拒み通したけれど、ケルンでの若い音楽家に対する室内楽の講習会には熱心だった。その時のエピソードをひとつ紹介しようか(独逸刊紙ツァイト9月21日付)。
ある青年がブラームスを弾くと、スターンは「この曲はどんな性格？」ときいたが、青年にはその意味が通せず、ただ先へ先へとひくばかり。終わるまで辛抱したスターンにもう一度きかれると、青年はボソッと「暗い色かしら？」と呟いた。途端にスターンの顔色が晴れ上がり「その通り。でも君の演奏からはそれが聞こえなかったよ」というと、青年は再び楽器をとり上げた。すると前とは全く違う音楽が鳴り出した——本当のブラームスが……。

(評論家)